

傅建偉 著
馬場節子 訳

酒の郷に酔いしれて ——紹興酒讃歌

中国出版集团
中国对外翻译出版公司

酒の郷に酔いしれて
——紹興酒讃歌——

傅建偉 著
馬場節子 訳

中国出版集团
中国对外翻译出版公司

图书在版编目(CIP)数据

沉醉酒乡: 日文/傅建伟著; (日)马场节子译. —北京: 中国对外翻译出版公司, 2009.10

ISBN 978-7-5001-2449-8

I. 沉… II. ①傅… ②马… III. 黄酒—文化—绍兴市—

日文 IV. TS971

中国版本图书馆CIP数据核字(2009)第172638号

出版发行 / 中国对外翻译出版公司

地 址 / 北京市西城区车公庄大街甲4号物华大厦六层

电 话 / (010)68359376 68359303 68359101 68357937

邮 编 / 100044

传 真 / (010)68357870

电子邮箱 / book@ctpc.com.cn

网 址 / <http://www.ctpc.com.cn>

出版策划 / 袁秋伟 茹拥政

特约编审 统筹 / 萧 歌

责任编辑 / 韦平和 岑 红

装帧设计 / 创意源文化艺术

排 版 / 北京创意源文化艺术有限公司

印 刷 / 沈阳铁路局锦州印刷厂

经 销 / 新华书店

规 格 / 730 × 988 毫米 1/16

印 张 / 16.375

字 数 / 220千字

版 次 / 2009年10月第一版

印 次 / 2009年10月第一次

印 数 / 1-5000

ISBN 978-7-5001-2449-8

定价: 56.00元



版权所有 侵权必究
中国对外翻译出版公司

中 国 出 版 集 团
中国对外翻译出版公司



酒造りびとはほろ酔い加減で真言を吐く

王旭烽

この命に関わる真理をもう一度繰り返す必要があるだろうか？何を以て憂いを解かん、惟だ杜康有るのみ。陸羽はあの遙かな盛唐時代に言った。「翼をもちて飛ぶ、毛をもちて走る、呷をもちて言う。此の三者は俱に天地の間に生まれ、飲啄を以て生き、飲む時は義遠きかな！若し渴きを救うには、漿を以て飲む。憂忿を蠲くには、酒を以て飲む。昏寐を蕩すには、茶を以て飲む。」してみると、酒の意義について、茶聖陸羽と詩雄曹操の理解するところは完全に一致していたのだった。酒はまさに人の魂の奥深いところに入りこむ飲み物である。

科学哲学者であるカール・ポパーの「人類の歴史は存在しない。存在するのは人類の生活のさまざまな面における歴史のみである」という考え方をわれわれが正しく理解することができるなら、この秘密にも通暁することができよう。秦の始皇帝、漢の武帝、唐の太宗、宋の太祖を中心として書かれた帝王の尊い位も、実は置き換えられるのである。角度を換えて、人類の飲み物、あるいは人類の酒という飲み物を歴史叙述の主体としても、人類の文明の大河はやはり連綿と流れて、今日に至っているということではないか。

この道理は何と簡単なことか。あたかも真理の直截性の如し。何故ならば生命の存在こそが結局は第一だからだ。人の身体の三分の二は水だということをわれわれは知っている。この割合は地球の陸地と水の比率に似ている。喉の渴きは飢餓よりも致命的だ。生命にとっては、呼吸を除けば、水より重要なものはほかにない。けれども、ただきれいな水を飲

むだけなら、人類の存在方式を貶めることになる。人も鳥獣や草木と全く同じになってしまう。このため、人類は生理的欲求を満たすと同時に、魂の必要も満たす飲み物をずっと探し求めた。そして一万年前に、澄んだ水以外の飲み物をついに発見したのである。

チグリス・ユーフラテス河流域に芽生えた近東文明が、人類の飲み物を味わう歴史を生んだ、と西洋人は考える。ビール、ワイン、焼酎が人類の歴史の歩みにともなうて相次いで生まれたというのである。だが本書の作者はこう考える。メソポタミアの人々がビールをすすっていた時、中国の長江流域に生まれた良渚文明の時代に、中華民族の祖先たちもまた、後に進化して「黄酒」となる華夏すなわち中国の飲み物を味わい始めていた。まさに黄酒の歴史を含む酒の歴史が、合流して、人類の酒を味わう文明史を形成したのだといっても差し支えあるまい。

専門的に深い内容を持ってこそ、人をして肅然と襟を正しめさせる。『酒の郷に酔いしれて——紹興酒讃歌』というこの紹興酒に関する専門書に、われわれは、黄酒の歴史の変遷を軸として、黄酒に含まれる概念の吟味を内容とし、黄酒の文化的伝達を視野に、黄酒を造りだした庶民を尊ぶ歴史の叙述を見出す。作者は中華の酒の歴史全体を見渡し、黄酒にまつわる政治、経済、軍事、文化的ことがらをすべからく集め、次のような総括をしている。酒は文化の酵母であり、中華民族が持つ伝統文化の眼を奪わんばかりに光り輝く至宝である。国興れば酒業栄え、酒の香が四方に満ちる。国衰えれば酒業もしぼみ、酒の味は苦くなる。酒の中には国の盛衰と時代の変遷がたゆたっているのである。

ここに、黄酒の持つ中国の優れた伝統文化に対する作者の立場がはっきりと見える。この立場はまた、この本を著すにあたっての基本となる考えでもある。全体が五つの部分に分かれ、それぞれ「酒と文化」、「酒をめぐる物語」、「酒と文人」、「酒、天下にまかり通る」、「幼き日の酒の思い出」となっているが、それぞれの部分は、分業はしても分家したわけではなく、別の部分でもしばしば共通する情報が伝えられている。それはまさに黄酒文化のすべての精神的事象である。かくも全面的かつ突っ込んだ黄酒文化に対する総括、解釈、発掘を通して、人々は紹興酒と民族性の間に内在するある種の関連に気がつく。黄酒の口あたりは心地よく、芳醇である。色合いは純粹で美しい。香りは長く続き、馥郁としている。飲んだ後の感覚はほろ酔い加減である。黄酒は飲む過程で人を暖かく包み込み、気持ちを解きほぐす奥深い飲み物である。口あたりがいいから、この酒の奔放な力を人は警戒しな





序文

い。このため、黄酒にはわが民族性の中にある生真面目さ、ひいては保守的な一面を解放する力があるのだ。だが黄酒は進退の分をわきまえている酒である。その品性は改革開放されたものであり、継承発展してきたものであって、古いものを打破しようとしたり、枯れ枝や腐った木をへし折ろうとしたりしているのではない。人の心について極端から別の極端へと放埒に走れと主張したりはしない。けじめをわきまえ、ほどよい狷介さを備え、順を追って事を進め、人類の文明発展史上で科学的な発展モードを体現している。最も激越で最も放埒な情感を伝えつつ、調和のとれた円満な挙措が浸透している。まさに紹興酒の精神的なありようと、黄酒という文化を正確に伝えようとする作者の努力によって、黄酒の文化的品格が高まり、一種の地域的な特色が鮮明な飲み物を、人類の文明という大きな枠組みの中に描き出されている。

世上に美酒は数多い。作者がその中でもこの酒を手にするのは、もとより理解できる。「我はもと天地の酒一盞、投身して人と為り世間に來れり」、作者自身も黄酒から造りだされたのであるとともに、中国醸酒工業協会黄酒分会技術委員会専門家チーム長をはじめ様々な肩書きを持っており、黄酒業界をリードしている。ところで、本書で最も私の心を打つのは、作者が最後に置いた、子供時代と酒に関する数編の文章である。心理と生理が二重に複合された精神的な飲み物として、黄酒は何よりも人類が実践によって感知できるものである。黄酒の滋味を知りたいければ、一献傾け、味わってこそ分かるのである。作者は幼少の頃から酒甕のかたわらで成長し、黄酒についての知識はすべて、まず鼻で嗅ぎ、口に入れることで得たのである。鼻で嗅いで口に入れて心に沁みこませ、魂に沁みわたらせて、酒造りびとはほろ酔い加減で真言を吐く。作者のこの花の間一壺の酒は、月下に独飲独酌の時、文才が上達し、独特の黄酒の香を人の世に漂わせている。

二〇〇九年五月四日

王旭烽：浙江省作家协会副主席 茅盾文学奖受賞者

目次

CONTENTS

序文：酒造りびとはほろ酔い加減で真言を吐く 王旭烽 001

酒と文化

酒についての私見 /003

紹興黄酒の科学的・社会的価値を論ず /011

中国黄酒の「黄」について /021

黄酒と儒教文化 /026

国の指導者たちと紹興酒 /030

美に国境なし——外国人の眼に映った黄酒 /045

紹興酒の酒甕文化 /052

国宴酒往事 /059

酒についての書物をひもとく /064

酒をめぐる物語

紹興酒よもやま話 /089

酒にまつわる紹興の名所旧跡 /096

人生には酒がつきもの /107

独特の気候風土が産む名酒 115

越の復興と酒の功 /125

酒の味を生かす紹興料理 /131

紹興酒の飲み方あれこれ /143

紹興人の「味」を解きほぐせば /151

酒と文人

- 紹興酒の功績——「蘭亭序」異聞 /159
 飲兵衛転じて酒造師となる /163
 李清照と紹興酒の断ちがたい絆 /167
 百歳の光陰半ば酒に帰す /173
 狂生酒に酔い奇才出づる /178
 春の初め東浦郷に客訪ねきたり 東浦十里酒の香を聞く /183
 近代における紹興の名士たちと紹興酒の深い絆 /187

酒、天下にまかり通る

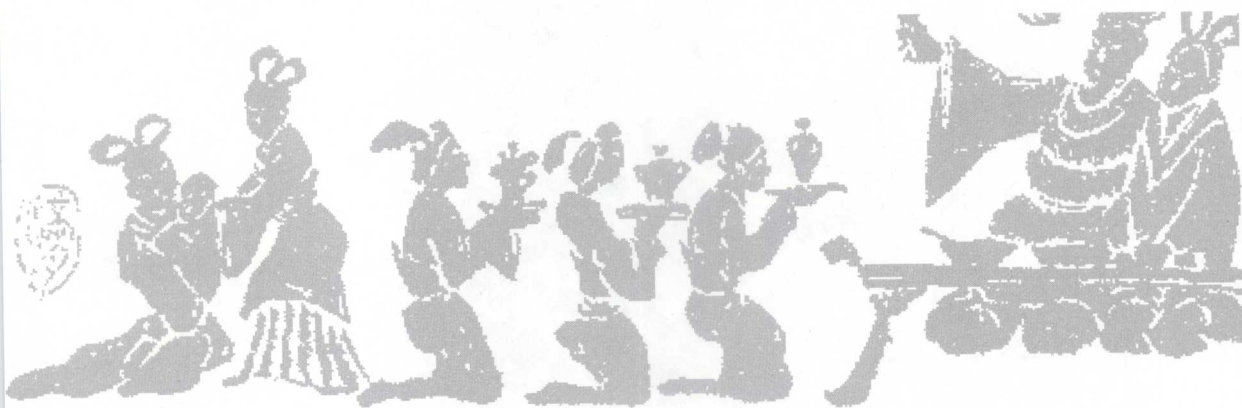
- 紹興酒・坊単・商道 /195
 体験型黄酒セールス /199
 うまさけには不思議な効能あり /204
 花蘇芳の花の下に漂う黄酒の香り /211
 紹興酒VS紹興師爺 /217
 長江デルタ地帯が引っ張る「黄酒ブーム」 /223
 根は同じでも、個性はそれぞれ /228
 日本人と紹興酒 /233

幼き日の酒の思い出

- 水郷の思い出は酒とともに /239
 幼き日の酒の思い出再び /244
 あとがき /251

酒と文化

文字、都市の雛形、青銅器の出現、祭祀の遺跡は、成熟した文明が確立したシンボルとされている。そのうち、青銅器が酒器であることは定説になっているし、酒は最初祭祀に用いられたので、酒は人類の文明の産物であり、文明の標識でもある。



威亨酒店

酒香賓咸集

人錄





酒についての私見

酒は物外物にして文明の産物である

■ 酒とは何か

酒とは何か?と問われれば、穀物や果物など澱粉もしくは糖を含む物質を発酵させて造るアルコール含有飲料であると即座に答えることができる。では質問の仕方を変えて、何をもって酒なのか、と問われれば、あれこれ考えをめぐらさねばならず、出て来る答もきつと異なるだろう。

酒は特殊な物質で、多重性を備えている。

まずその本質についていえば、酒は一種の物質であり、酸、エステル、アルコールなどのさまざまな化学成分を含有する混合飲料である。その主要な成分であるアルコールは消化器系を通らず直接胃腸に吸収される。酒を飲んで数分経つと、アルコールはまず血液によって肝臓に運ばれ、肝臓で濾過されてから心臓へ、さらには肺へと至り、肺から再び心臓に戻った後、主動脈を経て静脈に至り、さらに大脳と高級神経中枢に至る。そして人の生理と心理に不思議な作用を及ぼすのである。これがおそらく人類が酒を好む最も基本的な動機であり誘因であろう。

酒は人類の文明の産物であり、文明の標識でもある。酒がこの世に生まれて以来、身分の高い人から庶民に至るまで、さまざまな階層がいずれも酒と密接な関係を有してきた。酒は人々の日常生活の中で欠かすことのできない一部となった。より正確にいえば、酒は一種の文化であり、すでに中国数千年の歴史に溶け込んでいる。数千年という悠久の歴史を持つ「酒文化」は、中華民族が有する文化の宝庫の重要な構成部分だといってよいだろう。一方でその発展は中華民族の文化と相まっている。また一方では、中華民族の文化の中身を



きわめて豊かなものにしてきた。そのため、酒は文化の酵母であり、中華民族の伝統文化の輝ける至宝であるという人もいる。国栄えれば酒造業も盛んになり、酒の香りが四方に満つが、国衰えれば酒造業は衰微し、酒の味も苦くなる。酒の中には国の盛衰と時代の変遷がたゆたっているのである。酒はこの世に生まれ出てから、われわれ人類社会と朝夕を共にし、切っても切り離せないものとなった。酒と経済、酒と政治、酒と戦争、酒と友情、酒と詩画、酒と愛情、酒と宗教・・・酒は人類の有するすべてのものと密接な関係を持ち、かつ影響を及ぼしている。

中国人が酒を好むことは至るところに現れている。その影響の大きさ、深さは他の何ものも及ばぬところであろう。中国の政治、経済、軍事、文化を集中的に反映している四大古典文学名著の中で、『水滸伝』には飲酒の場面が647シーン現われる。章回小説であるから一つの章を一回と数えるが、一回につき平均して5シーン以上飲酒の場面があるという計算になる。『三国演义』には飲酒場面が319シーン出て来る。これも一回平均3シーン近い。酒によって軒昂たる意気が生まれ、俠気が湧き出てきたことがうかがえる。『西遊記』に描かれている仏門での生活にも飲酒の場面が103シーン出て来る。毎回平均1シーンである。酒肉腸を過ぎるも、仏祖心中に留まる、誠にもって可也! 栄国府と寧国府の生活を描いた『紅樓夢』にも、飲酒の場面が152シーン出て来る。まるまる全部宴会の場面の描写に費やされた回もあり、酒が愛情、家庭、社会の変遷とどれほどつながり、栄光と恥辱、喜びと憂いをともにしているかを物語っている。酒が社会生活の中で占める位置がいかに重要であるかがここから見てとれる。

酒は一種の文化形態、文化現象であるから、時代、地域、民族が異なれば、その内容ももとより千変万化となり、多彩な輝きを放っている。

■ 酒の起源

酒は人類が長い歴史発展の過程で創り出した飲料である。世界でもっとも古い酒は、イランのサマリアで出土したワインで、三千年あまり経った今も芳しい香りが人を酔わせる。中国で最も古い酒は、西安から出土した漢代の宮廷用酒である。専門家の考証によれば穀物酒(黄酒であるという専門家もいる)で、驚くべきことに、今に至るもなお芳香を放ち、飲むこともできる。

中国の甲骨文には早くから酒の字や酒と関係のある醴、尊、酉などの文字が出て来る。酒の存在の久しさがここから証明される。文学や史書の記載に至っては枚挙にいとまがない。たとえば中国初の詩歌集である『詩経・大雅・即醉』の中に「既に酒を以って酔い、既



酒と文化

に徳を以って飽く」という句があるし、『周易』、『周礼』、『礼記』、『左伝』などの典籍の中には、酒にまつわる古代の習俗についての記載がさらに多い。たとえば「酒は以って老を養うもの也」（『礼記』）、「酒を以って礼を成す」（『左伝』）など。これらは、酒にはさまざまな用途があり、生活習俗の中で欠かすことができないものであったことを物語っている。

酒がいつ生まれたかについては、今では考証のすべがない。

おそらく原始社会の採集漁猟経済の時代に、人類は、熟した後に木のほらや石の隙間に自然に落ちて発酵した野生の果実の中に、酒の原型を見出したのであろう。

原始農業文明の発展にともなって、人々は余剰「米穀」を持つようになった。こうした「変質」した食物は酸化して腐ったものもあるが、一部は食用できる米酒になった。生産力が高くなるにつれて、先人たちは食物が酒になるプロセスを観察し、その原因を突き止めようと模索するようになった。

同様に、酒の発明・創造について、中国の各民族の民間には多くの美しい言い伝えが流布している。『戦国策・魏策二』の中には、「昔、帝の娘は儀狄に酒を作らしめて美しとし、之を禹に進むれば、禹飲みて之を甘しとするも、遂に儀狄を疏んじ、旨酒を絶たしめて曰





く、後世必ず酒を以て其の国を亡ぼす者有り」と記されている。この言い伝えは後世の人が作り出したものであるかもしれないが、少なくとも中国の歴史の伝承時代に早くも酒が誕生していたことを示している。

民間には、夏の時代の杜康が酒造の鼻祖であるとの言い伝えも流布している。曹操の『短歌行』の中に「何を以て憂いを解かん、惟だ杜康有るのみ」という名句があり、当時の杜康酒が、今風の言葉でいえばブランド品であったことがうかがわれる。

今日のわれわれが中国の昔の酒造技術を知ろうとするのは難しい。だが『礼記・月令篇』の中に記されている酒造における六つの注意事項「秬稷は必ず齊い、曲蘖は必ず時をえ、湛熾は必ず潔く、水泉は必ず香り、陶器は必ず良く、火齊は必ずほどよきを得る」から、原料、麴の添加、浸し茹で、水質、器物、火加減など酒造の重要なプロセスについて、古人がこれほどに高く明確な要求を出していたのを見てとることができる。これは当時の酒造法がすでに成熟したものであったことを示すものである。当時造られたのは果実酒や米酒などアルコール度が低い酒で、焼酎などアルコール度の高い酒が造られるようになったのは元代に始まる。明代の李時珍は『本草綱目』の中で「焼酎は古法に非ざるなり、元の時より創し始む」と述べている。元代に蒸留技術が発明されたのを機に、酒の生産は長足の進歩を遂げたい。当時は専門の焼酎醸造場もあったが、米酒や果実酒は民間に早くから存在していた。

■ 酒と政治

酒が政治的飲料となったのは、中国の儒家学説にいう礼治思想によるものである。礼は政治の実践の中に貫徹しなければならず、国の政権は文という手と武という手の両手で維持するものである。『左記・成公十三年』に曰く、「国の大事は、祀と戎に在り」。中国の古代においては、祭祀は君主が臣民に礼治を広めることの範を垂れるものであり、天意を代表して民草を治める帝王に臣民が敬虔と崇拝を示す方式でもあった。祭祀の儀式に示される上下尊卑の等級名分は、臣民が必ずや守らねばならぬものであった。南宋の詞人劉克庄の「天下の英雄、使君（劉備）と操（曹操）なり、余誰ぞ酒杯を共にするに堪えん」に従えば、他の者はみな劉備と曹操と同じ卓で杯を合わせる資格がないというのだから、政治上の等級は何と厳しかったことか。今に至るも、こうした現象は意識するとしないとかかわらずわれわれの日常生活に影響を及ぼしている。酒宴の席順における尊卑の別はなお礼を中心としている。

さらに、楚と漢の戦いを象徴する「鴻門の会」、三国時代の曹操の「酔って後楊修を殺

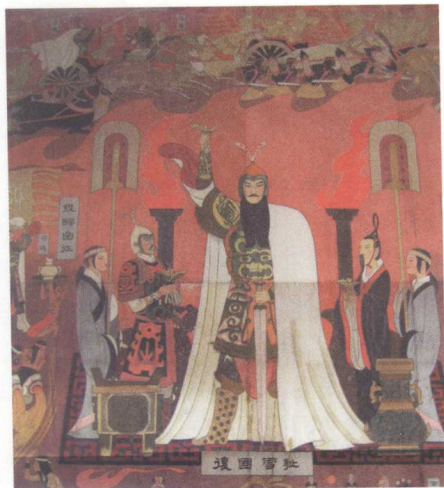


酒と文化

す」、北宋の開祖趙匡胤の「杯酒もて兵権を釈く」等々を見よ。宮廷において毒酒を用い権力を篡奪しようとする政治的事件もたびたび起きている。酒はつねにその中であって媒介の役割を果たしているのである。

■ 酒といくさ

小生は、酒は軍事において動員令となすことができる考える。古代と現代とを問わず、酒といくさの関係は切っても切り離せない。軍隊が戦争に出かける前には出征壮行の酒を飲み、凱旋後は勝利を祝う酒を飲む。「野幕瓊宴を做き、羌戎勞旋を賀す。酔いて和しては金甲の舞い、鼓叩いて山川を動す」(盧綸)。軍隊が勝ちいくさを収めると、それに続くのは盛大な宴会、異民族からの祝賀、酔いに乗じた狂舞、天を突く太鼓の音である。歴史上、酒で壮行し、酒で勝利を祝った事例には事欠かない。



◇越王・勾踐像

越王勾踐は兵を率いて呉討伐に向かう前、酒を川の上流に投げ入れ、川から流れて来る酒を將兵とともに飲んだ。士気大いに奮い、「箠醪勞師」という長きにわたって伝えられる佳話を残した。秦の穆公は晋討伐に向かう前、酒食で兵をねぎらって士気を鼓舞しようと考えたが、酒が杯一つ分しかなかったため、穆公はこの杯を川にこぼして兵士らと分かち合った。三軍はこれを飲み干し、酔うほどの酒ではなかったが心自ずから酔ったという。前漢の時代に、大將軍霍去病は河西の失地を回復するのに功があり、漢の武帝が酒を賜って労をねぎらった。酒は少なく兵が多かったため、霍去病は酒を井戸に投げ入れて、兵士たちとともに飲んだ。人は逝ったが、歴史は永く伝わり、今日の酒泉はなお黙々と遠い昔の故事を人々に語り続けている。映画『甘嶺に上る』の挿入歌にある「朋友來たれば佳き酒あり、けだもの來たれば、これを迎えるのは獵銃だ」というのも、実質的にはやはり志願軍が家を守り国を守るための「動員令」である。酒にはたしかに士気を鼓舞し、精神を奮い立たせる働きがあることは事実が物語っている。

■ 酒と文人たち

酒と詩は、遠い昔から、水と乳のようによく融け合ってきた。「李白は一斗詩百篇」、「何



時のときか一樽の酒、重ねて細やかに文を論ず」、「敏捷にして詩千首、飄零にして酒一杯」。杜甫が李白を憶って詠んだこれらの名句と欧陽修の「天楽しく地楽し、山楽しく水楽し、皆酒が有ることに因る」は好例であろう。こうした好例はある道理を浮き彫りにしている。酒は水と火の結晶であり（二つの極端の融合、事物の中庸によって、予想もしなかった絶妙な結果が生じる。これは人類の偉大な傑作である）、人の気持ちをのびのびさせ、人の本質と人生の要諦をひとしお会得させる。酒によって創作の衝動が芽生え、情感の扉が大きく開け放たれ、想像の翼を広げた詩人は古今内外に幾人いるか知れない。またどれだけの優れた詩や書画が酒によって生まれ、存分に意を尽くし、形と心を兼ね備えているか知れない。ほろ酔いの時の心持ちと創作の靈感が訪れる際の心理的体験は、同工異曲で帰するところは同じであり、あたかも双子の兄弟のように、一人の人間ではなくとも、互いを分かち難い。芸術の靈感が訪れる時は、「狂」の境地に入ったように、情感が溢れ出て、幻想は羽を広げて高く羽ばたき、イメージが次から次へと湧き出て来る。頭の働きが異常に活発になり、刹那のうちに物も自分も忘れてしまう。時空の限界と功利の欲求を超えて、渾然として出来上がった審美の境地を得る。徐渭の「酒に酔いて青藤を描く」、蘇軾の「酒を把りて青天に問う」は、いずれも世上に稀な傑作であるが、酒の手柄というべきであろう。歴史上の詩人墨客は、飲酒すれば詩を欲し、詩を賦しては酒を思い、詩中に酒あり、酒から詩が生まれていた。李白の「杯を挙げて明月を邀う」、蘇軾の「酒を把りて青天に問う」、杜甫の「詩を説いて能く夜を累し、酒に酔いて或いは朝に連なる」、毛沢東の「酒(さかずき)を把ちて滔滔たるにそそぎちかえば、心の潮浪を逐いて高まりくる」などの名高い詩句は、酒が詩人の想像の翼であることを十分に物語っている。

同様に、酒は書画芸術家にとっても、名作を生み出す触媒だといえる。「画聖」と讃えられる呉道子は、「筆を振るわんと欲するたびに、心ゆくまで酒を飲むべし」と言い、皇帝が嘉陵江三百里の山水の風景を描くよう命じると、彼は酒を飲んだ後に筆をとり、一日にして描き上げた。王羲之は酔って筆をふるい、『蘭亭集序』を書き上げて、酒から醒めると「更に数十の書を書こうとも、終には之に及ぶこと能はず」言った。懷素は酒に酔って潑墨をし、鬼神をも驚かす『自叙帖』を遺した。「三杯草聖伝」の張旭は「大いに酔うたび、叫びつつ走り回り、はじめて筆をおろす」、こうして「揮毫紙に落ちれば雲煙の如し」といわれる『古詩四帖』が生まれた。

■ 酒と経済

酒は経済においても活力素の役割を担っている。酒は、それ自体が附加価値の高い商品



酒と文化

である。飲酒はきわめて普遍的な社会活動であるから、消費者はあまねく存在する。それゆえに酒造業は従来から厚い利益を得る産業であった。昔は、酒坊を開けば、次から次へと金が転がり込んで、豪商になることができた。

南宋の時代に、皇帝趙構は金の来襲を避けて紹興に逃れたが、莫大な出費をまかなうために、紹興酒の生産を育成するという政策を打ち出した。こうして「越の地には酒家のあらざるところなし」、「城中酒壚千百家」というありさまになったのである。

今日、ブランド名酒は地元の「主導産業」として、地元の経済振興の重責を担っている。白酒の六銘柄、ビールの数社の大手企業、ワインの三大メーカー、黄酒の古越龍山・・・地元の経済のために力を尽くしていないものはない。このほか、酒は経済交流、関係緊密化、感情疎通の面でも他の商品では代替できない役割を備えており、工場誘致、地域経済活性化の面でつねに「活力素」の役目を果たしているのである。

■ 酒と社会的交際

酒は人との交際における媒介であり、接着剤である。「気の合った人と飲めば千杯でも足らず、話が合わなければ半句でも多い」とはよく言われることである。飲酒は友好を伝える一種の方式である。「友と交わるには、つねに酒を飲むべし」と俗に言う。酒は人との交際と内在的な関連があり、飲酒は友と知り合うための格好なきっかけを提供してくれる。酒が入れば、友人間の感情がさらに打ち解ける。李白が詠ったように、「五花の馬、千金の裘、児を呼び将出して美酒に換へ、爾と同じく銷さん万古の愁」であり、「古来聖賢は皆寂寞たり、唯だ飲者の其名を留むる有り」は真情の発露である。酒はまた個人間の恩讐を解かすための効果的な手段でもある。「劫波を度(す) ごし尽くせば兄弟在り、酒杯を捧げ持てば恩讐を泯す」。双方の間にどれほど深く恨みが積もり重なっていようと、杯を手にしさえすれば、いさかいはもう解けたようなものである。

飲酒は交友のために格好の機会を提供してくれる。一人の友のところで酒を飲めば、多くの新たな友と知り合うことができる。友の友はまた新たな友となり、こうして友達の輪がどんどん広がり、天下にあまねく友を持つことになる。杯を挙げてともに飲む「同心酒」、腕を絡めて一気に飲み干す「誓いの酒」は、お互いの理解を深め、心の繋がりを密にする役割を持つだけでなく、ひいては運命をともにし、生死を同じくするという誓いの効果をも果たすのである。

飲酒はまた個人の風采と魅力を示す重要な窓でもある。温雅な姿態、きちんとした舉措、すぐれた言行は良好な印象を残し、あなたの社会的地位と知名度を高めるであろう。